最近の本院における川崎病既往児の心後遺症の推移モデルの考察
（分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究）

馬場國藏，冨田安彦，深谷隆

要約：

1）現状では発症時の川崎病による冠動脈瘤発生率は５％ぐらいである．
2）遠隔期の心後遺症率は２％～３％である．
3）巨大冠動脈瘤ないし冠動脈閉塞性病変の発生率は１％である．この数字は本研究班の１２回全国調査の結果と一致する．
4）川崎病の入院期間は１４日とするのが妥当である．

見出し語：ガンマグロブリン療法，コスト計算，冠動脈病変予後モデル

＜目的＞現在の川崎病に対するガンマグロブリン療法のコスト計算を行う preliminary study として本研究を行った．薬物療法のコスト計算には，その薬剤を使った予後モデル（冠動脈後遺症の推移モデル）の作成が必要である．前回，筆者らがコスト計算を行ったのは'８９年である．それ以後，病児の管理やガンマグロブリン療法の進歩などによって後遺症の率やその遠隔期予後に改善がみられ，はるかにその予後は良くなっている．そこで現状がどうなっているのかを筆者らの病院の例で検討し，病変の推移モデル作成の基礎資料とすることを目指した．

＜結果＞1994,1末までに，筆者らが初回冠動脈造影（ＣＡＧ）を行って何らかの異常所見があった症例は１３４例である．その予後の内訳を表１に示すが，その詳細検討は本題とずれるので，ここではおく．

その内，発症期（冠動脈瘤ができる前）から本院で治療にタッチした例は７６例（５７％）である．1976,12から1981,11までの初期の５年間では１２／１４（８６％）であったものが，1985,11までの１０年間では４３／８０（５４％），さらに，最近の５年間では，５／２７（１９％）と冠動脈病変を残した例に占める本院での発症期からの例は著しく減少してきている（表２）．つまり，以前は川崎病罹患児はほぼ全例に近く急性期から私共のような専門機関に送られてきていたものが，現在では心後遺症を残した患児の処理機関として専門機関が期待されているようになったといえる．

つぎに，最近の５年間に発症期から本院で治療した症例の心後遺症の比率を検討してみた（表３）．'８９～'９３までの５年間には発症期から本院に入院した例が１３５例存在した．その内，冠動脈瘤をきたしたものは５例４％である．３例が瘤の消褪をみているので，遠隔期まで後遺症を残した率は２例２％となる．１例には巨大冠動脈瘤を残し，２回以上にわたって心筋梗塞を来している．

最後に，筆者らの病院ではこの５年間に川崎病に対するガンマグロブリン療法は２００ｍｇ／Ｋ／ｄ×５日間から，４００ｍｇ／Ｋ／ｄ×５日間，さらに，入院後ただちに断層心エコー検査を行い，瘤がなければまず１ｇ／Ｋを投与する，それで解熱や他の症状の改善が見られなければ翌日再度１ｇ／Ｋを投与するといった１ショット療法に切り替わってきた．その結果，８９年から９３年にかけての平均入院期間は，２６±１６，１９±７，

Department of Pediatrics, Kobe City General Hospital

１８±８，１５±９，９±４日と短縮してきている．

<まとめ>以上からガンマグロブリン療法のコスト計算の基礎資料として，現行のガンマグロブリン療法を行えば，要約のごとく，①発症時の川崎病による冠動脈瘤発生率は５％以下である．②遠隔期の心後遺症率は２％～３％である．③巨大冠動脈瘤ないし冠動脈閉塞性病変の発生率は１％である．この数字は本研究班の１２回全国調査の結果と一致する．④川崎病の入院期間は現状１４日とするのが妥当である．

表１　初回冠動脈造影で何らかの異常を認めた例（総数１３４例）

	症例数	比率
瘤消褪	３７	２８％
拡大性病変残存	４１	３１％
閉塞性病変残存	４９	３７％
明らかな心筋梗塞例	９	７％
死亡例	１	１％
急性期のみのＣＡＧ例	７	

表２　初回冠動脈造影で異常があった内（１３４例）発症期から本院でみたもの（ '76,12 ~ '93,12 ）

全期間	７６／１３４	５７％
初期の５年間（ '76,12 ~ '81,11 ）	１２／　１４	８６％
初期の１０年間（ '76,12 ~ '85,11 ）	４３／　８０	５４％
最近の５年間	５／　２７	１９％

表３　過去５年間の発症期から本院への入院例（'89~'93）

	症例	冠動脈瘤あり	消褪例	巨大例	残存例
'89	21	3	2	1	1
'90	30	0	0	0	0
'91	33	1	1	0	0
'92	22	1	0	0	1
'93	29	0	0	9	0
計	135	5(4%)	3	1(1%)	2(2%)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:

1)現状では発症時の川崎病による冠動脈瘤発生率は 5%ぐらいである.

2)遠隔期の心後遺症率は 2%〜3%である.

3)巨大冠動脈瘤ないし冠動脈閉塞性病変の発生率は 1%である.この数字は本研究班の 12 回全国調査の結果と一致する.

4)川崎病の入院期間は 14 日とするのが妥当である.